

『恋情の音色』

著:六堂葉月

ill:六芦かえで

綺麗に整頓されたその部屋には香が焚かれていて、以前、薫から感じたあの甘いような独特の香りはこれだったのかと納得する。

「どうぞ…」

薫は三上に座るように促すと、茶を淹れる支度を始めた。

「今日は夕立もなく、一日いいお天気で本当によかったですね」

茶托の上に載せられた緑茶。それを三上にそっと差し出し、薫がゆっくりと話を切り出してくる。

「それで…お相手の方はどうでしたか？」

「……」

「渡邊画伯のお孫さん、確か圭子さんでしたっけ？ 彼女なら僕も以前に一度だけお話ししたことがあります。清楚なかわいらしい方ですよ…とても」

無言のままの三上に対し、薫はひとり喋り続ける。

しかし、そんな薫が一度も自分と目を合わせようとしないうことを、三上は気がついていた。

薫の言葉を遮るように、三上は少し強めの口調できっぱりと告げた。

「今日のことなら、お断りしようと思っている」

よほど驚いたのか、薫は初めてその顔をこちらに向けた。

「…どうして？まさか、圭子さんが気に入らなかったのですか？」

「彼女がどうかという問題ではない」

「では、なぜ…？」

「……」

重く気まずい雰囲気、薫は視線を逸らすとただ項垂れた。

黙り込むふたりの耳に、夏の夜風に揺れる軒下の風鈴が、チリリン、チリリンと優しい音を奏でる。

やがて長い沈黙を破り、薫が小さな声で話した。

「…将来のことを考えれば、こんないい縁組は他にないと父も言っています。将来のために誰かのもとに付くのはしたたかな行為かもしれませんが、そうしなければ得られないものも世の中にはあるんですよ」

薫は静かに現実を語る。でもそんなことは言われるまでもなく三上にはわかっていた。わかっていたからこそ、口にしてもらいたくなかったのだ。

「———それでおまえはここにいるのか？」

低い声が重く部屋に響いた。

「…えっ？」

「おまえにとって今のこの不自由のない生活は、他の何に引き換えても決して手放したくはないものなのか？」

三上のこの言葉はさすがに薫にも堪えたのか、たちまち大きな瞳にじわりと涙を滲

ませる。

しかし気丈にも、そのまま上目遣いで睨むようにきっぱり言い返した。
「そうだったらなんだと言うんですか？ 僕のことなど、あなたには関係ないんですよ」

「……」

(なぜ、そんな眼で俺を見る？)

三上の無言の問いは、無論薫へは届かない。

(川端を想うあまりか…？)

ゆっくりと動いた三上は、薫の細い顎を片手で掴むと上を向かせ、己の顔を近づけた。

口づけられるのかと、薫はびくりと身構えたが、それを嘲笑うかのように唇が触れ合わないぎりぎりの距離をわざと保つと冷酷に告げる。

「おまえの幸せなど安いものだな…」

三上は既に自分に巢喰う、狂気にも似た嫉妬を知っていた。

「あなたに何がわかるって言うんですかっ！」

パシンッ。

乾いた音がした瞬間、ひりりと頬に痛みが走る。三上に手を上げた薫は、そのまま力を失ったように項垂れた。

「あなたは…本当に、僕が嫌いで…嫌いで、仕方ないんですね」

ぽろぽろと零れ落ちる涙の粒が、畳に吸い込まれる。

三上は打たれた自分の頬を撫でると、そんな薫を見下ろし静かに言った。

「おまえが先生を愛しているというなら、俺が立ち入ることではなかったな」

そう、薫と川端の生活など、自分には関係ないことなのだ。

頭ではもちろんわかっている。しかし一度小波が立った心は、そう簡単には静まってはくれない。

その言葉に薫は両手で顔を覆い、大きく頭を振った。

「違うっ、違いますっ。愛してなんかいない！ そんなこと言わないでっ！」

切なげな瞳。

川端との情交。

雨の日の口づけ。

婚約を勧める言葉。

記憶の中の薫は、いつも自分の感情を煽り立てるように振る舞う。

そして、こんな今ですら同じ口で言うのだ。

川端とのことは、愛ではないと――。

(どうして…俺の心を惑わせる！)

焚かれている香の香りに誘われるように、突然三上は感情のまま、力任せに小さな身体を引き倒した。

「…っ」

勢いで口のつけられていない茶が、茶托とともに畳に転がり零れる。

大きな右手が、薫の細い首に添えられていた。今にも力が込められそうなほどしつかりと。

「――！」

驚きに瞳を見開いて薫は三上を見上げるが、やがてなんの抵抗もせず視線を逸らした。

そしてぽつりと、呟くように尋ねる。

「ひょっとして…殺したいくらい憎いとか…？」

「……」

「やっぱり、そうなんですね」

何も答えないのを肯定の返事だと受け取って、薫は言った。

「…わかりました。あなたになら、殺されたってかまわない。こんな汚れた身体なんていないし。どうせ生きていてもなんの値打ちもないから」

薫は再び三上を見上げ、自嘲的な笑みを浮かべる。そして三上の左手もそっと自分の首へと導いた。

「さあ、ちゃんと両手できつく、きつく絞めて」

言われるままに三上が両手の力をわずかに加えると、薫は静かに瞼を閉じる。その目尻からは一筋の涙が零れた。

「……三…上…さん…」

おそらく無意識だろう、その小さな呟き。

掠れる声で自分の名を呼ぶ声を耳にしたとき、三上は理性が弾け飛ぶのを感じた。

はだけた着物の裾から、しなやかに伸びる白い脚。

紅を差したわけでもないのに赤く色づく唇。

薫のすべてを求めるように、三上は激しく薫に口づけ、貪り捕らえようとした。

歯列を割り、大胆に舌で口内を舐る。

「んっ……んんっ」

薫は吐息のようなものを漏らしたが、三上になされるがままだった。

「薫…」

おまえは汚れてなどいないと、本心はそう告げてやりたかった。

自分の心を掻き乱す、これほど美しい人を三上は他に知らない。

それは見た目の姿だけではない。こうして触れると、その清い心が伝わってくるかのようだ。

しかしその想いを言葉に発することができず、三上は口づけの合間、別の言葉を囁いた。

「——おまえを見ていると、眩暈がする」

本文 p58～64 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>